

第2回障害者文化芸術活動推進有識者会議用資料

「障害児のいる場にアーティストが行く活動」

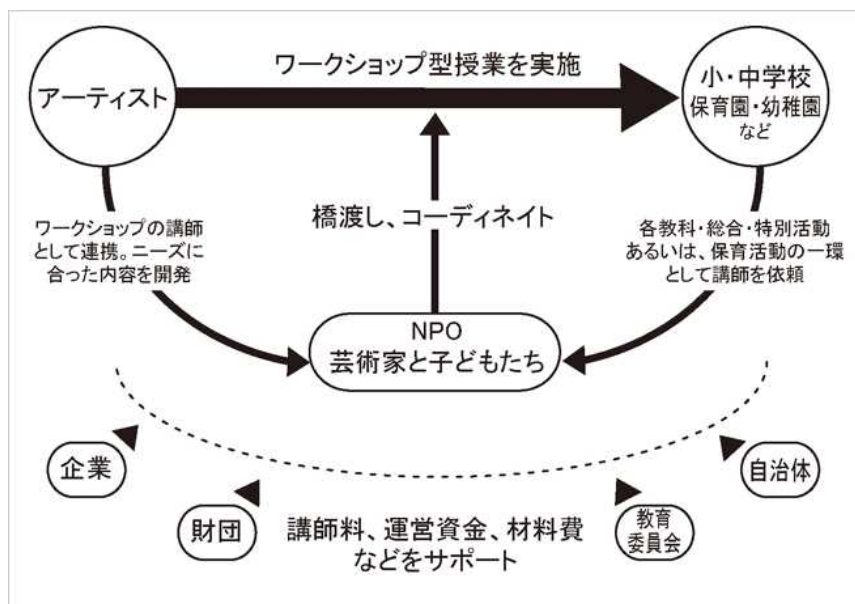
～ 小中学校特別支援学級や特別支援学校等でのワークショップの実践 ～

2018.10.23

NPO法人芸術家と子どもたち 堤康彦

## 1) エイジラス・プロジェクトの概要と、そのうちの障害児を対象とした活動について

### ○ エイジラス (ASIAS=Artist's Studio In A School) とは？



### < エイジラスの実績 >

- ・2000年度にスタートし、今年で19年目。
- ・過去18年間の実績  
⇒ 約950か所、約40,800人の子どもたちが体験。
- ・2017年度の実績  
小学校40校、中学校5校、幼稚園10園、保育園30園、  
児童養護施設6施設、障害児入所施設1施設  
⇒ 合計92か所、延べ361日間実施。  
対象児童・生徒数 3,317人。
- ・芸術ジャンル  
⇒ ダンス、音楽、美術、演劇の主に4分野。

### ○ 障害児を対象とした、エイジラスの展開

- ・小中学校の通常級での授業；発達障害等の児童生徒を含む（平均2～3人/クラス）
- ・小中学校の特別支援学級（固定級・通級教室）での授業 ⇒2017年度実績；小学校24校・328人、中学校4校・137人参加。
- ・小中学校で、特別支援学級(固定級)と通常級の交流及び共同学習（インクルーシブ）授業 ⇒2016・2017年度に各1校で実施。
- ・特別支援学校での授業 ⇒2018年度、2校（知的障害及び重度重複障害）で実施中。
- ・障害児入所施設でのワークショップ ⇒2015年度から1施設（同一施設、知的障害等、重度&軽度）で継続実施中。
- ・児童養護施設でのワークショップ；発達障害・愛着障害等児童を含む ⇒2017年度実績；6施設、延べ58日間、78人参加。

### ○ 取り組みの多様化

- ・長期間のワークショップ～同じ学校・施設で半年、通年実施、あるいは年度を越えて数年間、継続する場合もある。
- ・ワークショップ（授業）の成果発表～オリジナルの舞台作品を創作して学校行事等で発表することも多い。

## 2) 障害児とアーティストの出会いの場づくり

### ○ エイジアスの特徴

- ①アーティストが子供の日常の（生活している）時間・場所に行く活動
- ②ワークショップであること～参加・体験、相互がフラットで双方向の関係性、プロセス重視
- ③アーティストと担当教員（施設職員）との共同作業によるワークショップ（授業）づくり
- ④“コンテンポラリー”アーティストの起用～同時代の新たな表現・価値を生み出すアーティスト
- ⑤コーディネーターによる手厚いサポート～アートと、教育・福祉等双方に精通した専門性を持つスタッフ

### ○ アート／アーティスト が得意とすること

- ①“身体”に関する（体育的でない）アプローチ…弱く不安定な身体、微妙な身体感覚、五感に響くワーク。
- ②ものの見方を変える、既成概念を疑う、異なる価値観・表現を認める…リテラシー、他者理解。
- ③自己肯定感を高める…教員とは違った視点で子供の表現に注目。小さな成功体験を積み重ねるワークを提供。  
⇒子どもたちがリアルに感じられる（本当だと思える）機会の提供。

### ○ 影響・効果

#### 自己肯定感、自尊感情、自己表現力の向上

#### 他者とのコミュニケーションや関係づくりの質的向上

→特に、言語以外の、音楽や身体表現による他者との即興的やり取りは、個々の違いを認め合いつつ、共同で何かを生み出す喜びを味わう貴重な体験となる。

さらに、

→一緒に参加し表現・創作活動をする、障害のない、あるいはグレーゾーンの子供に対する影響・効果も大。

→参加アーティストや担当教員（施設職員）への影響・効果も大。

### 3) 障害児の文化芸術活動の推進において必要なこと、期待すること

- 教育や福祉の現場（＝障害児が学び生活している場）での活動をもっと促進する。
- ハード面より、人と人との交流・コミュニケーションを重視した活動を促進する。
- ダンスや音楽等パフォーミングアーツ分野での共同創作や即興的表現のやり取りをする機会を促進する。
- アートやアート作品というより、アーティストという人を介在させる活動を促進する。
- 知的障害・発達障害の子供たちの活動を促進する。
  - ゆっくりな発達、凸凹のある発達、刺激に対する別な回路による反応、こだわりなど、表現・創作活動にとっては、負とならない、独創的な個性を持つ子供たちに寄り添い共感することが大事。
  - 特に、自閉症児は、感覚が鋭敏で、独特な他者との関わり合い方をする、革新的な発想をする、など、文化芸術活動において、アーティストはじめ、創作に携わる人には多いに学ぶべきところがあるので、脳科学者などの研究者とも連携しながら、当事者の行動や言葉に謙虚に耳を傾け、彼らの活動や彼らとのワークショップを推進していく環境を整備する。
- 美術やデザイン分野等で障害者・児の作品を世の中に発信することも大事だが、創作プロセスや人をもっと発信したい。
- 障害の有無を超えたインクルーシブな活動の推進 ～そのためには言語に頼らない、身体や音楽等による表現活動をともに楽しむことから相互の理解を深めることが効果的と思われる。
- コーディネーターに対する支援とその育成 ～障害児の文化芸術活動、あるいは障害の有無に寄らないインクルーシブな活動を推進する環境を整えるためには、学校や障害児施設とアーティストとを橋渡しするコーディネーター、すなわち、アートと、教育・福祉分野双方に精通し調整能力を有した人材を支援し、彼らを育成することが肝要と思われる。

